



# 緑茶搾取滓の飼料/堆肥化事例

# 1. 背景

## (1) 循環型社会実現の高まり(ゼロエミッション)

- ・食品リサイクル法施行(平成13年5月1日)によるリサイクルの社会的ニーズの高まり、県単位でのリサイクル率の上乗せ基準がおこなわれている。
- ・飲料業界として各種絞り粕(緑茶、混合茶、コーヒー等)産廃としての廃棄問題。  
年間生産量のほとんどが廃棄されており、そのための処理費用は膨大である。

## (2) 飼料市場の環境変化

- ・飼料安全法に基づき肉骨粉等を含む全ての家畜用飼料の製造・販売・家畜への給与を法的に禁止(農水省H13.10.15)の影響により飼料化環境の変化
- ・狂牛病の発生により動物性蛋白から他原料への切換え。欧州での状況を見るとこの転換は長期的に進む。

## (3) 飼料原材料開発の動き

- ・混合茶や緑茶をはじめいろいろな廃棄物を利用した飼料原料の開発が行われてきたが課題は多い。
- ・繊維質、原材料の安定供給の面からみると飲料搾取滓の再利用は可能性が高い。
- ・再利用工場を建設する方式では、地域住民ヒアリング、環境アセス、事業認可に等に時間がかかりなかなか進展しない。

## (4) 肥料・堆肥市場

- ・生産業者の高齢化と低価格化により、生産量はこの10年やや減少傾向にあったが、堆肥用水分調整剤として今後は安定的に推移するものと考えられる。

## 2. 内容

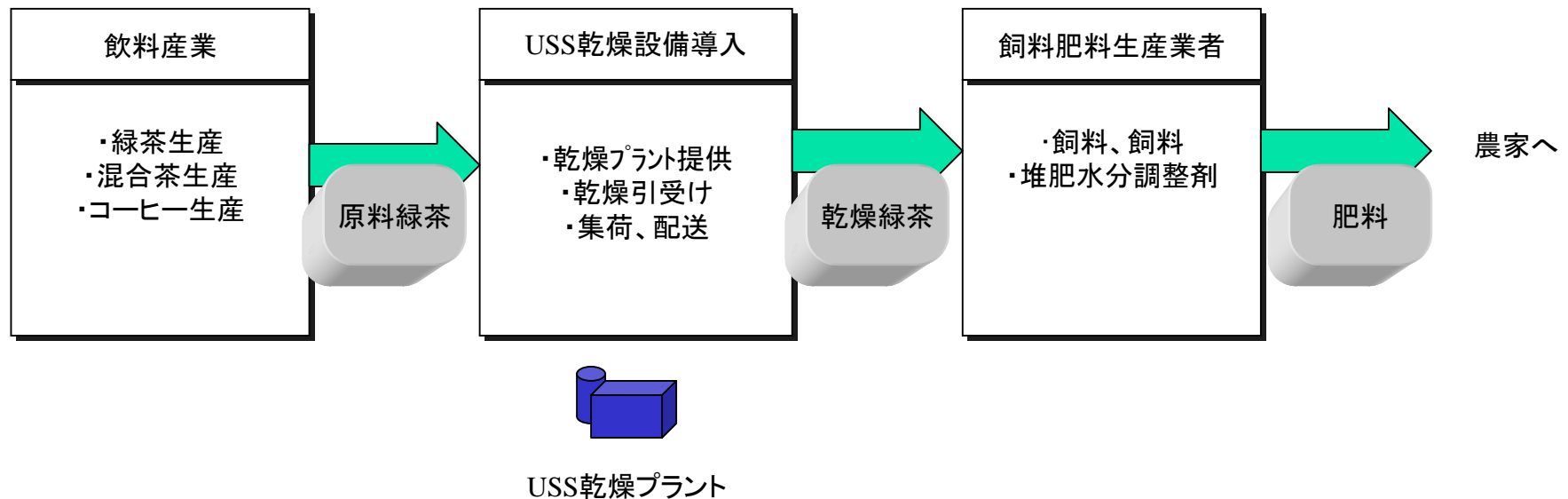
### <内容>

今まで有料で廃棄処分していた茶滓を乾燥させ、飼料、肥料、堆肥用水分調整剤として安定的に、かつ安価に原材料として供給する。

### <乾燥茶粕の特徴>

- ①含水率(10%程度)の飼料、肥料、堆肥原料
- ②定期的に、安定的に、大量に供給可能
- ③既存の原料に比べ安価

### <提供形態概要図>



### 3. 飲料メーカー様 & 肥料会社様のメリット

乾燥茶滓を堆肥化の水分調整剤とすることは、以下のようなメリットがあり、「社会的貢献」「経済的貢献」は非常に大きい。

#### (1) 循環型社会実現、リサイクルへの貢献による企業イメージアップ

- ・消費者、生産者、農家をつなぐ循環として、社会的なバリューチェーン構築に積極的な企業としての評価。
- ・日本の農業政策に貢献する企業としての評価

#### (2) 季節、相場に左右されない安価な飼料・肥料・堆肥水分調整剤として原材料の確保

- ・混合茶の乾燥茶滓及び堆肥原材料用水分調整剤としての乾燥茶滓の価格変動は少ない。

#### (3) 飲料業界の環境変化への対応

- ・食品リサイクル法施工の上乗せ基準への対応を早急に進めるとともに、産廃処理の削減等一過性の対応ではなく抜本的対応策となる。
- ・有名飲料メーカーの乾燥茶滓リサイクルは、ブランドイメージ力とトレーサビリティに対する信頼性がある。